日本文化を伝承する古民家の移築再生

近年、古民家の空間的価値や古材の良さが見直されるなど、古民家に対する関心が高まりを見せています。そして、壊して建て替えるのではなく、可能な限り再生して住み続けたいという方も増えています。

大田市においても、過疎化や市中心部への移転により、資源として再生利用が可能な古民家が散在しています。

これらをリフォームや移築をしたり、部材として再生利用することは、建築廃材の抑制のみならず、古民家・古材の流通という新しい産業の創出に結びつくなど、地域資源としての新たな展開の可能性も秘めています。

行政や市内の商工団体、企業で構成する大田地域雇用創出促進協議会では、古民家の有効性を再評価し、再生利活用するため、解体から移築に至る技術を習得する研修会を3月11日から15日まで開催しました。県内外から設計や施工など建築関係者や大学生ら約180人が参加し、大屋町の築100年の古民家を解体しました。

伝統工法の特徴を説明しながら解体しました

大屋町からフランスへ

解体された古民家は、大田市内の建築関連業者を中心に結成されたNPO法人日本古民家研究会により、フランス南部に移築される予定です。

これは、慶応大学大学院の三宅理一教授から、世界有数の家具のコレクションを誇る『ヴィトラ・デザイン・ミュージアム』が、伝統的な日本家屋を探していることを同研究会に紹介されたことが発端となりました。

同研究会やミュージアムの関係者などが幾多の候補を視察した結果、この古民家に決定しました。今秋には移築され、日本文化を伝承する施設として、新たな役目を担っていくものと期待されます。

◆問い合わせ
NPO日本古民家研究会
大田支部長　金田慶三さん
TEL　0854（85）2314
※古民家の保存や移築再生などを主な活動として取り組んでいます。

シリーズ

新 石見銀山②

古い地名

その土地土地がどのような歴史を持っているのか続いてきたのか、その由来や変遷をたどる一つの手段が『古い地名』を探ることです。今回は沖泊（おきどまり）（温泉津町の港湾集落）を例にとって考えてみました。

沖泊は中世末、ここより北東に位置する鞆ケ浦（ともがうら）（仁摩町）から銀鉱石の運び出しの機能が移転した港です。並行して銀山柵内への物資の荷入れも担う役割も果たすこととなりました。

入り江に位置する鵜ノ丸城跡は毛利氏が築城した城跡ですが、この一帯には、物見、本所、屋形、城殿、厩（うまや）など城館に関わる名前が残っています。集落周辺には薩摩、延岡、北国など九州から東北までの海上交通を知る地名もあります。また、湾外の海上からよく見渡せる場所には、万度・沖万度、磁石という地名が付してあり、夜間や荒れた日に寄航を誘導するため、たくさんのともし火を焚いたであろう『万燈』や無事に船が接岸できるよう工夫した跡が想像できます。

それぞれの地名は、人間の営みを反映したものである一方、歴史の過程の中で既に記号化されたものも多くあります。また、正確に現在へ引き継がれているとは限りませんし、その解釈も時代や他地域と比較し検討することも必要です。

しかし、歴史を正しく理解し、先人たちの活動をうかがい知る一つの手段として、そこに残っている地名を探りながら現地を歩いてみることは大切であり、楽しいことと思います。

北東上空から温泉津湾を望む

中央の小湾が沖泊と集落、その左尾根の突端が『鵜ノ丸城跡』